

BUKUMO  
INTERVIEW

本へのラブとパッションを振りまくプロジェクト

PICKUP E-BOOKS

REVIEW

INTERVIEW

SPECIAL



BUKUMO INTERVIEW | 004

天と地の響き求め、世界中を旅されてきた真砂秀朗さん。画家、民族楽器奏者、ネイティブフルート奏者として著名な真砂さんに、従来の書籍という枠を超えて取り組まれた立体的な電子書籍による新しいアートの世界について、お話を聞かせていただきました。

聞き手：BUKUMO編集長・にしはたとしろう

撮影：西田 圭介

2012年5月23日

[f いいね!](#) 24 [B!](#) [ツイート](#)

## 自己の、そして日本人のアイデンティティを探し求めて

—音楽との出会いや民族楽器との出会いには、何かキッカケとなるものが真砂

さんの中にあっただのですか？

真砂：学生時代にボブ・ディラン、ジョン・レノン、ドノバン、ドアーズ、といった新しい音楽が次々に登場し、彼らの音楽活動にリアルタイムで触れているうちに、その音楽の輝き、ストレートに心に伝わる表現に魅了されたことが始まりです。自分でも音楽で表現してみたいという思いが芽生えたわけですね。当時、レコード屋さんに行くと今まで知らなかった新しい世界があって、それに惹き込まれていった。それで自分でも音楽をやりたいと思い、渋谷にあった「ジャンジャン」というライブハウスでオーディションを受け、弾き語りを始めたのです。

—学生運動が下火になりかけていた頃ですね。

真砂：あの頃、上の世代は学生運動やベトナム反戦運動などイデオロギーというか社会と戦うことが先端的なことだったと思うのですが、僕の頃は学生運動も下火になり、フラワーチルドレンのような新しいムーブメントが登場した頃でした。「イージーライダー」を始め、ニューシネマが次々に上映され、精神的な豊かさや平和であることの価値といったものを強く意識するようになりました。上の世代の頃は重苦しい感じの時代で、そのあとに自由で感覚的な時代がやってきた。そこに登場したヒッピーのようなアメリカのカウンターカルチャーのカッコ良さ、ボブ・ディランやジョン・レノンなどの音楽、そのメッセージ性の高さ、影響力といったものが、私にとっては先端的なものとなったのです。

—憧れたわけですね。

真砂：当時ビートルズをはじめ、いろいろなアーティストがヒッピー文化の影

響で、インドを旅していました。米国の若者たちもコミュニンをつくって新しい世界を拓こうとしていた。当時はそういった最先端なものに触れたいという思いが強くあり、多くのアーティストが旅して回るインドへ行こうと考えました。まだ19、20歳の頃、何か新しい体験ができるんじゃないかと思って半年ぐらいインドを旅行しました。

—インドでの体験はその後の活動に何かの影響を与えましたか？

真砂：そうですね。最初はよくわからなくてインド各地を観光旅行のように回りました。カルカッタから入り、ボンベイ、ゴアと各地を巡り、知り合ったヒッピーたちが皆ネパールのカトマンズへ行くので、そちらへも足を運びました。そこで肝炎になってしまって、インドに戻ってからたいへんな思いをしました。身体が黄色くなって、動けなくなった。死ぬかと思いました。

そんな経験もして、インドという国を旅していくうちに、当初思い描いていた精神的なインスピレーションを感じるような旅路ではなくなっていきます。街ではリッチとプアが天と地ほどの差のなかで暮らしていたり、道端に死にそうな人がいたり、生と死が目の前にあふれていました。なんて言うかスケールの違うカルマ（業）というようなものに触れてしまって、その中に引き込まれていったのです。まだ若かったのでインドの中に渦巻く人間のカルマを全部受け止めてしまったのですね。そうこうするうちに自分の中にあるアイデンティティが何だか見えなくなり、自分の人としての意識が真っ白になってしまった。アメリカのカウンターカルチャーにはまり、フォークシンガーのようにヒッピーの格好をしてギターを弾いている自分の必然性がまったくないんじゃないかと感じ始めたのです。

帰国しても半年ぐらいは頭の中は真っ白のまま、自分の思いを整理できなかった。それまで形成してきたマインドを解体しなければならない状況に陥って

いました。たとえば「日本て何なの?」、「西洋って何なの?」「自分とは何なの?」。そういった基本的なところからもう一度構築しなければならないところまで追い込まれてしまった。

—自分の意識を解体するところまで突き詰めたのですね。

真砂：日本に戻ってきても半年ぐらいは何も手がかず聴く音楽も変わりましたね。インドの音楽や各地の民族音楽、レゲエや、日本では喜多郎さんのような音楽を聞くようになりました。

自分では「ビッグクエスチョン」と呼んでいるのですが、インドへ行って人間の生きる様に触れ、そのカルマに圧倒され、インドという象徴的な社会を理解しても、やはりそこには大きな疑問が残ったままになってしまったのですね。大きな疑問を抱えたままその解答が見出せなくなっていたので、そのままでは終われなくなってしまう、「ビッグクエスチョン」の答えを求めて各地を旅するようになりました。西アフリカに行ったり、他のアジアの国へ行き、その旅の中で現地生活や民族音楽に触れ、自然と融和しながら暮らす人々に出会い、その文化や暮らし方に深く共感できるようになるのです。

'80年頃、インドネシアのバリ島に何度か滞在することがあって、そこでバリヒンドゥーの人々の暮らしに触れたのですが、村の人たちは9割ぐらいがお百姓さんで、午前中は農作業をして、午後は彫り物などを作り、夕方からガムランのオーケストラをみんなで演奏し、そのような暮らしのまま世界ツアーに出たりするんです。

当時、バリの人たちのライフスタイルにはとても影響を受けました。

—その頃から民族音楽に惹かれていったのですか？

真砂：最初バリ島の音楽や世界各地の民族音楽に触れ、そのあとアフリカのパーカッションに惹かれ、それで「しおのみち」という民族楽器を使ったニューエイジのCDをプロデュースしたのです。

「しおのみち」とは「潮の流れを旅する」という意味も含まれているのですが、日本には昔からいろいろな音楽が海を渡って伝えられ、日本人は昔からそれを楽しんできた。今もアフリカやスラブや、世界中の音楽を楽しんでいる。これだけ世界各地の音楽を楽しむ民族はほかにはいないのではないのだろうか、そういう日本人の特性も意識して「しおのみち」では国や民族にとらわれる事なく、地球の上に住む者としての意識を色々な民族楽器の音色でつづろうと思ったわけです。

—民族音楽に触れる中で新しい世界が見えてきたのですね。

真砂：その頃民族音楽が世界中で注目され始めていました。それはCDが普及し、音がデジタル化され音楽表現が変わったことも影響しています。

CDの登場で、レコードではノイズの中にあった音楽がデジタルではノイズのない世界で響くわけです。そうすると、元々民族楽器にはノイズや倍音が多く含まれていて、その自然のノイズが際立ってくるのですね。白い壁の中にアンティークがある方が、アンティークな背景にアンティークが置かれているよりも、際立つようなものですね。CDの中で民族音楽は初めて録音物として成立してきたという感覚が僕の中にはあります。



—インディアンフルートとの出会いも、その頃から始まったのですか？

真砂：'80年代後半になるとワールド・ミュージックが世界的にヒットし、日本でもアフリカのミュージシャンが来日したり、世界各地の民族音楽が紹介されたりしていました。アメリカでも同じ頃、ネイティブアメリカンの音楽がヒットしていました。

'92年にアメリカ南西部のニューメキシコやアリゾナを旅した折、インディアンフルートを初めて白人の世界に広めたナヴァホ族のカルロス・ナカイさんを訪ね、彼の家でセッションをして交流をしました。

翌年カルロスさんを日本に呼んで、各地のツアーに同行しました。そのときずっとカルロスさんの背中を見ているうちに、インディアンフルートの魅力に惹き込まれていったのです。

'95年には、ナヴァホ族の聖地チャコ・キャニオンという大自然の中、広大な大

地と空とが響きあうような場所で、インディアンフルートや民族楽器を演奏し、[「Chaco Journey」](#)というCDアルバムを作りました。

—「ビッグクエスチョン」の答えを見つけ出されていったのですね。

真砂：バリヒンドゥーの暮らしやアメリカ先住民の文化に触れ、その断片の中で、自然と一体となった世界、インドで体験したカルマのようなエゴではなく、ポストエゴとでも言うような、自然と共生するような世界を見つけていったわけです。

iPadアプリ レインボウボックス リズム

BUKUMO  
INTERVIEW

本へのラブとパッションを振りまくプロジェクト

PICKUP E-BOOKS

REVIEW

INTERVIEW

SPECIAL

## 自然と音との繋がりをデザインする



—真砂さんは田んぼを耕されていますが、農業もバリヒンドゥーやインディアンの暮らしと関係があるのですか？

真砂：僕が行なっているのは仕事としての農業ではなく、ライフスタイルとしての“農”なんです。地球と繋がるための“農”としての“田んぼ”を12年間してきました。

もちろんバリヒンドゥーやインディアンの生き方から影響を受けたところからですが、直接的なキッカケは反原発運動を行ったことですね。'86年にチェルノブイリの原発事故が起き、日本でも'88年に反原発運動が盛んに行われた中で、「いのちの祭り」という1週間で7000人ぐらい動員した非常に大規模なエコロジーイベントを長野県八ヶ岳山麓で主催しました。

そのイベントにはミュージシャンや、当時反原発運動にたずさわっていた多くの人たちが集まったのですが、そのときの実行委員で、今“田んぼ”をしている人は多いです。何かそういうメッセージを発信した結果が自分に戻ってきた感じですね。

#### —自らエコロジー活動に取り組もうと？

真砂：その時、デンマークの風車運動の提唱者ウルリッヒ・ヨヒムセンさんという方も呼びして、自然エネルギー運動のレクチャーを受けたりしたのですが、その結果、ノー・ニュークス（反核・反原発）とメッセージを謳っているだけじゃだめじゃないか？ 何か自分でも取り組まないといけないんじゃないかと考えたのです。

それで、家にソーラーパネルも取付けましたが、ライフスタイルとして“田んぼ”をやってみよう。

#### — から田んぼを耕して稲を育てるとするのは大変

ウルリッヒ・ヨヒムセン：1980年代初め、「分散型エネルギーシステム」を提唱し、反原発の市民運動に大きな影響を与えた。

藤本敏夫：元全学連委員長。学生運動の旗手から転じ、日本の農業を変えようと新しい農法に取り組む。自然をなるべく壊さず環境に負担をかけない循環型農業の文化的

ではなかったですか？

真砂：それがやってみると、エコロジーという思想のためにやるのではなく、田んぼをやること自体が気持ち良くて楽しくて仕方がないということに気づいたわけです。楽しいから12年も続けています。藤本敏夫さんの講演会からは大きな影響を受けました。そこで藤本さんは“小規模山間農”の魅力について語られていました。

“小規模山間農”というのは、山間に残った農地に取り組むことで、機械化していく中で捨てられていく田んぼや畑です。藤本さんはそこに大きな可能性を見つけていた。棚田は子供たちの教育の場になるし、参加する人たちのリクリエーションやスポーツにもなるし、周辺の自然保護にもなる。一石四鳥とか五鳥とかの効果があると仰っていたわけです。

“小規模山間農”が如何に魅力的かという話が自分の心の中にも入ってきた。最初は千葉の方まで出掛けて行って田んぼをしていましたが、葉山に田んぼを見つけたくて、そんな折たまたま葉山のお寺さんでコンサートがあって、終わった後、住職さんと話していたら、「そういえば裏の山に棚田が空いてる」と聞いて。（笑）

葉山では棚田があまり残っていないのですが、その中の1つが20年間放ってあった。それを再生したのが12年前ですね。

—十代の頃からのいろいろな経験を経て、今のご自分を、真砂さんはどのように捉えているのでしょうか？

真砂：そう、縄文の器というのは世界で最初に作られたと言われていますが、日本人のアイデンティティは“縄文の器”じゃないかと思うのです。田んぼのある谷戸に座っていると、谷が奥深いところで森に繋がるように、僕

たちの心の奥底には縄文の靈性が広がっているのを感じることがあるのですね。母なる森と海に身をゆだね、自然から全く分離していない感性、宇宙そのものの心というか、縄文人たちは空なる器のような心を持っていたと思えてくるのです。だから、縄文の心を受け継いだ日本人は、いつの時代でも、その空なる器に外来の全てを受け入れ、混ぜ合わせて、新しくいのちを与えてきた。そういう何でも受け入れられる人たちは世界では非常に珍しい存在なわけですね。インドにはインドという世界が強烈にある。大陸では何かが入って来ると、染まるか染めるしかない、だから戦いになるわけです。でも日本人の場合は何かが入って来て、それに染まってもいつの間にか全部がその“器”に入っていて、いつしか混じりあっている。その基になっているのが“空”という感覚であり、縄文的な感覚なんですね。

これはアメリカ・インディアンにも似た感覚があって、彼らも“空”という美意識を持っているんです。

BUKUMO  
INTERVIEW

本へのラブとパッションを振りまくプロジェクト

PICKUP E-BOOKS

REVIEW

INTERVIEW

SPECIAL

いいね! 24 ツイート

## これからの世界、そして電子書籍づくり



—“ビッグクエスチョン”の解を求め、世界を旅され、絵画、音楽、農を追求されてこられた真砂さんから見て、これからの世界がどのように変化するのか、お聞かせいただけませんか。

真砂：そうですね。今は大きなパラダイムシフトが来ているんじゃないでしょうか。世界は今まで国家や民族やさらには地球を支配するというコントロールシステムで動いてきたと僕は考えています。世界を管理し、統一しようというグローバル化の流れもそうで、そこにパラダイムシフトが起きると、その対極にあるものは何だろうと考えるのですね。それを僕はシンクロシステムと呼んでいます。たとえば森は誰かが全体を計画したのではなく、一本一本の木々が生える事で、森として成長していきますね。それがまさにシンクロシステムで、自然界は本来的にバランスされていると思うわけです。情報の世界でも、コントロールシステムからシンクロシステムへという大きなパラダイムシフトのうねりが始まっていますね。そしてその結果、心が求める本当の自分という所に帰結し、自分たち自身も無機的意识から有機的意识へ、もっと抽象的に言えば一神教的世界観から多神教的世界観へ、シフトして行くのではないかと考えています。

たぶん、この2, 3千年の間ずっとコントロールシステムを追求してきた結果が今に出てきて、環境破壊、社会の崩壊などいろいろな事象として現れた。文明が限界に来ていることはみんな認識してきたと思うんですね。

“農”をやっているといろんなところで感じるのですが、水を張った田んぼは、まるで子宮のように生命を育む。冬期たん水農法では冬から水を張っているの、春にはいろいろな水中生物の赤ちゃんでいっぱいになる。それを蛇の赤ちゃんや他の生き物が食べに来る。おたまじゃくしや水中生物が、有機物を分解し、それが肥料となり、土を耕すことになる。そういった自然界のシンクロシステムに人間の技術をマッチさせていくことで、より充実した社会に変わっていくのではないかと期待しています。

—自然と社会と技術がシンクロする世界が到来するというのでしょうか？

真砂：葉山でインターネットラジオをやっている友人がいて、完成すれば世界中で60万人の人が聴くというわけです。この町から発信した音楽が、世界中の人とシンクロしていくわけです。テクノロジーもシンクロする方へ進んでいく。たぶん家庭用発電機とか、新しいテクノロジーが開発され、それがこれからの社会を変えていくんだろうなと思うのです。イデオロギーじゃなく、新しい商品であったり、情報であったり、良質なものが生まれて社会を変えていくと思います。

—今回、弊社の制作スタッフと一緒に電子書籍を創っていただきましたが、今までの創作活動とは違う何か新しいものを感じられましたか？

真砂：日常的に絵を描いたり、音楽を創ったり、“農”に取り組んだりしているわけですが、自分の中ではすべてデザインする行為なので一体として繋がっているのですが、絵本にしてもCDアルバムにしても作品は独立しています。それが電子書籍技術を通して一体として表現できることは良いですね。もちろん永野さん（弊社制作スタッフ）のような方とコラボしないとできないことでもあるのですが、絵が動いたり、音と連動したり、音楽が流れたり、いろんなことができるとうわくと、制作スタッフはみんな欲が出るというか、どんどんデータ量が増えていくわけです。「あれもできるんじゃないか」「これもできるんじゃないか」って書籍の枠を超えイメージが広がっていくわけです。それがとても面白かったですね。

僕が創る世界にはいろんな物語がその奥にあるのですが、その物語が立体的に表現できるようになったわけです。これまでできなかったアプリケーション的な表現はとても面白いわけですね。これからそういう作品をさらに組み立てて創って行きたいですね。

—真砂さんの絵本「レインボウブックスシリーズ」の電子書籍化は、弊社にとっても冒険的な取り組みでした。非常にシンプルな線で描かれた作品の中に真砂さんの世界が詰まっている。それをどのように表現するかはたいへん難しい作業でした。本日のインタビューでいろいろなお話をお聞きし、「レインボウブックスシリーズ」に盛り込まれた数々の物語が見えてきたような気がします。

本日は長時間に渡って、とても素晴らしいお話をお聞かせいただきました。ありがとうございました。

iPadアプリ レインボウブックス いのち

BUKUMO  
INTERVIEW

本へのラブとパッションを振りまくプロジェクト

PICKUP E-BOOKS

REVIEW

INTERVIEW

SPECIAL

f いいね! 24 B! ツイート

## レインボウブックスの電子書籍化にあたって

永野 朗夫談（ながの あきお：CO2パブリッシング・アートディレクター）



今回、レインボウブックスiPad版の制作を担当させていただきました。1990年に刊行された本シリーズは、乳幼児向けの絵本ということもあり一見ごくシンプルです。ゆえにどう電子書籍化すればよいか、はじめは戸惑いがありました。しかし絵本の世界を解体しiPadに再構成していくなかで、著者・真砂さんの深い世界が裏書きされていることを知り、ちょっとした感動がありま

した。例えば「ながれ」という作品では、水の様々な様態とそれをめぐる人々が描かれています。一つ一つの場面はそれはそれで味わいがあって楽しいのですが、通してみると、そうした水の大きな循環の物語となっているのがわかります。各書はシンプルながらそれぞれ通してみても初めてわかる大きな主題があり、気づきの多い絵本となっています。

#### iPadアプリ レインボウボックス ながれ

電子書籍化にあたっては、単なる紙芝居にならないように色々な仕掛けを盛り込んでいます。先述の「ながれ」では、画面をタッチして初めて水が流れる、という具合です。水は共通した表現にしているので、有様を変えながらも本質としては変わらない、との思いを伝えるものにもなっています。

ただ制作期間がタイトで、真砂さんと私がこれくらいでいいかな、とまとめたアイデアが出版社のご担当者「まだまだ」とだめだしを頂いたり、真砂さ

んも乗って色々アイデアを提供されたりで、「時間がないのに…」と楽しくも苦しい制作となってしまいました。おかげさまで満足できる作品となったと思います。

今回の制作はひと言でいえば絵本の「アニメーション」化と考えています。「アニメーション」はラテン語の「animus（息、心、命）」から来ているのですが、単に動きを与えたという以上に、絵本に「息」を吹き込んで新しい「命」を与えることができたと思います。音楽家でもある真砂さんの魅力的な書き下ろし曲もふんだんに盛り込まれ、電子書籍にした意義のある作品になったのではないのでしょうか。

iPadアプリ レインボウボックス きもち

iPadアプリ レインボウボックス ことば

## iPadアプリ レインボウボックス かたち

← Back

1 2 3 4

### Profile



#### 真砂 秀朗 (まさご ひであき)

1952年東京生まれ。東京藝術大学デザイン科在学中に、渋谷にあったライブハウス「ジャンジャン」で弾き語りデビュー。その後、自分のアイデンティティを探し求め、世界中を旅して回る。各地のネイティブカルチャーに触れ、旅の中で出会った民族楽器に魅了され、独自の音楽活動を開始。「風のように旅する音」というアースミュージックで作曲をし、著名なミュージシャン達とコラボレーションを行い、画家、民族楽器奏者、ネイティブフルート奏者として新境地を拓く。

[AWAMUSE on line](#) ◆ [Hideaki MASAGO Home Page](#)

### Pick Up



#### iPadアプリ レインボウボックス リズム

三起商行 (ミキハウス)

「リズム」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、初めての“音楽あそび”におすすめのアプリです。ページをめくると、西アフリカを中心とする地域の人々の生活の中で伝えられてきたリズムが、楽しい動きをするイラストとともに流れてきます。...

500円 (税込)



#### iPadアプリ レインボウボックス きもち

三起商行 (ミキハウス)

「きもち」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、人間の表情をモチーフとした、使い手の音声に反応するアプリです。ページをめくると、いろいろな“きもち”を表す表情と、そんな“きもち”にさせる自然の営みが切り絵風のイラストであらわれ、音声に反応して楽しく動きます。...

500円 (税込)



500円 (税込)

## iPadアプリ レインボウブックス いのち

三起商行 (ミキハウス)

「いのち」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、親子の愛情をモチーフとした、子どもの感性を刺激するアプリです。ページをめくると、水彩画のやさしいタッチで動物の親子の営みがあらわれます。それに合わせた音楽とともに心あたたまるときがすごせます。...



500円 (税込)

## iPadアプリ レインボウブックス ことば

三起商行 (ミキハウス)

「ことば」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、“オノマトペ=擬音・擬態語”を楽しく動くイラストとともに聞くことができるアプリです。ページをめくると、絵にあわせたオノマトペが子どもや大人の、様々な年代の声で聞こえてきます。日本語の豊富な言語表現にふれることにより、子どもたちの表現力を広げ、コミュニケーション能力を高めます。...



500円 (税込)

## iPadアプリ レインボウブックス かたち

三起商行 (ミキハウス)

「かたち」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、“かたち”と“かず”を、楽しく動くイラストと音階とともに学び・聞くことにより、想像力や発想力を豊かにするきっかけとなるアプリです。ページをめくると、1からはじまる切り絵風のイラストがあらわれ、自然の中にある“かたち”の中にある“かず”が見えてきます。...



500円 (税込)

## iPadアプリ レインボウブックス ながれ

三起商行 (ミキハウス)

「ながれ」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、“水のながれ”をテーマに、心を癒す音楽と効果音を聞きながら、楽しく動くイラストを見ることにより、気持ちを穏やかにし、想像力や発想力を豊かにするきっかけとなるアプリです。ページをめくると、地球をめぐる“水のながれ”と“いのち”の関係をイメージでき、いつも世界を美しくしている“水”への感謝の気持ちが自然と湧いてきます。...



500円(税込)

## iPadアプリ レインボウボックス ひかり

三起商行(ミキハウス)

「ひかり」は、小さなお子様でもすぐに楽しめる、「ひかり」をテーマに、心を癒す音楽と効果音を聞きながら、楽しく動くイラストを見ることにより、気持ちを穏やかにし、想像力や発想力を豊かにするきっかけとなるアプリです。ページをめくると、いろんな色の光の中で遊ぶ少年があらわれ、心にうかぶ色々な動物たちに変身していきます。少年の素直な気持ちと、豊かな感性にふれることによって、世界は“光”につまれ、その中で私達は生きていることをイメージできます。...

### BACK NUMBER

2012年5月23日

BUKUMO INTERVIEW 4 真砂 秀朗 絵と音で織りなすヒーリングアートの世界を立体的な電子書籍に定着されたアーティスト・真砂 秀朗さんに聞く

2012年4月10日

BUKUMO INTERVIEW 3 花輪 陽子 インターネットメディアで最良の自己発信を目指す“大逆転ファンショナルプランナー”

2012年2月10日

BUKUMO INTERVIEW 2 Electricwoods L.L.C. 吉川 和成 電子書籍ビューアのF1を作った開発者

2011年12月10日

BUKUMO INTERVIEW 1 アクセルマーク 中塚 慧 売れる！電子書籍を編み出す



すべての皆様へ

BUKUMOとは

ユーザ登録する(無料)

リリース・お知らせ

出店をお考えの皆様

資料請求

出店のお申込み

よくある質問

このサイトの利用にあたって

個人情報保護方針

サイト利用規約